

「一人じゃない」と感じられる訪問介護を目指して

～職員の声と、社会への願い～

訪問介護の仕事に携わって17年。今では管理者として事業所の運営にも関わっていますが、現場にも出続けています。というより、出ないと回らないのが現実です。慢性的な人手不足。求人を出しても応募は少なく、ようやく来てくれた方も「思っていたより大変でした」と数ヶ月で辞めてしまうこともあります。

訪問介護は、一人で利用者さんのお宅に伺う仕事です。判断力、観察力、気配り、そして時には勇気も必要です。新人職員の多くが最初に感じるのは「不安」。ある職員はこう言いました。

「最初の訪問は、正直怖かったです。でも、先輩が“何かあったらすぐ電話して”と言ってくれて、心強かった。今では“ありがとう”の一言が、何よりの励みです。」

別の職員はこう話します。

「利用者さんの生活に深く関わるからこそ、信頼関係が築けたときの喜びは大きい。ある日、“あなたが来てくれると安心する”と言われて、涙が出そうになりました。」

こうした声は、現場のリアルであり、訪問介護の本質を物語っています。私自身も、ある独居の男性利用者さんとの関係が、たった一言の会話から少しずつ深まっていった経験があります。心が通う瞬間があるから、この仕事はやめられないのです。

しかし、やりがいだけでは職員は定着しません。介護報酬の枠の中で、移動時間の手当や研修費を捻出するのは難しく、待遇改善には限界があります。ICTの導入で記録業務の効率化は進みましたが、それでも「人の手」は必要です。

それでも、私たちは「働きやすさ」を大切にしています。訪問の合間に一息つける時間を確保し、急な体調不良にも柔軟に対応できるよう、職員同士で支え合っています。「無理しないで」「今日は少し休んで」そんな言葉が自然に飛び交う職場です。

訪問介護は、利用者さんの“暮らし”に寄り添う仕事です。施設とは違い、その人の生活そのものに関わるからこそ、細やかな気配りと柔軟な対応が求められます。だからこそ、私たち介護職員が安心して働ける環境が必要です。

お願いしたいのは、「介護＝大変でつらい仕事」というイメージだけで判断しないでほしいということ。確かに大変です。でも、それ以上に、誰かの“日常”を支えることの尊さ、やりがい、そして人と人とのつながりの温かさがあります。

そして、制度をつくる側、支える側の皆さんには、現場の声にもっと耳を傾けてほしい。報酬制度の見直し、移動や記録に対する評価、研修やメンタルケアの充実—現場の声を反映した制度設計が、介護の未来を支える鍵になると信じています。

17年働いてきて、私はこの仕事が本当に好きだと心から思います。だからこそ、もっと多くの人にこの仕事の魅力を知ってほしい。そして、安心して長く働ける環境を、社会全体でつくりたい。それが、私たち現場の願いです。

未来への展望

私たちが今、訪問介護の現場で直面している課題は決して一事業所だけの問題ではありません。高齢化が進む中で、在宅での生活を望む方は今後ますます増えていくでしょう。つまり、訪問介護のニーズは確実に高まる一方で、それを支える人材の確保と育成が追いついていないのが現状です。

このままでは、必要なサービスを必要な人に届けられない未来が来てしまうかもしれません。だからこそ、今、私たちは「持続可能な訪問介護」のあり方を真剣に考えなければならないと感じています。

そのためには、まず「介護＝大変で報われない仕事」というイメージを変えていく必要があります。介護は、誰かの人生に深く関わる、かけがえのない仕事です。もっと誇りを持って語れる職業にしていくためには、現場の声を社会に届け、制度や仕組みの改善を求めていくことが不可欠です。

たとえば、ICTやAIの活用によって、テクノロジーが現場を支える場面は今後ますます増えていくでしょう。ただし、それはあくまで「人の手」を補完するものであり、代替ではありません。人と人との信頼関係が土台にあるこの仕事において、最も大切なのは「人の力」です。

また、地域との連携も未来の鍵になります。医療・福祉・行政・地域住民が一体となって、高齢者を支える仕組みをつくること。たとえば、地域包括ケアの中で訪問介護が果たす役割を明確にし、もっと地域に開かれた存在になることが求められています。

そして何より、働く人が「ここで働き続けたい」と思える職場づくりが必要です。給与や待遇の改善はもちろん、相談しやすい雰囲気、成長できる環境、仲間とのつながり…そうした「人を大切にす文化」が根づいた職場こそが、これからの介護を支えていくのだと思います。

私は、訪問介護の未来に希望を持っています。なぜなら、今も現場には、誰かの暮らしを支えたいと願う温かい心を持った人たちがいるからです。その想いがつながっていけば、きっとこの仕事はもっと魅力的になり、もっと多くの人に選ばれる仕事になるはずです。

17年という時間の中で、たくさんの出会いと別れがありました。笑顔も、涙も、迷いも、誇りも。すべてが私の原動力です。これからも、現場の声を大切にしながら、訪問介護の未来を、仲間たちと一緒に築いていきたいと思っています。

ヘルパーN